

デイストピアの悪夢の中で試される「力」

——星野智幸『呪文』について——

セリンジャー（朝さろん）

朝さろんの本棚〈52〉…2015年10月8日（木）

テーマ〈現代政治の思想と行動 (1)〉

1 現代政治の思想と行動 (1)：現代日本政治の精神状況

今シーズンとりあげる作品に共通するのは「町」という舞台、つまり「生活のある場所」だ。このごく身近な（でありながらどこか遠い）ものとして想像できる場所には、当然たくさんの人間が暮らしている。読者ひとりひとりの生活と地続きのものとして想像可能な場所を舞台として描かれた物語を、だからこそ実生活（実社会）の「陰画」と受け取ることもできるのではないだろうか。

今シーズンのテーマは「現代政治の思想と行動」である。あまりにも耳馴れてしまった「政治」という語だが、政治とは本当は人間のどんな考え（思想）や運動（行動）を指し示すものなのか……。そういう原点を、辞書的な言葉の定義ではなく、生活と身近な舞台で巻き起こる物語を通じて体感的に検討してみたい、というのがこのテーマにこめた狙いの一つである。

鴻巣友季子氏は『呪文』は日本社会の容赦ない縮図として、さびれゆく小さな商店街と狂った独裁者を描くことで、共同体精神の未熟さと自殺の構造を辛辣に解き明かしているのではないかと指摘している（書評、『毎日新聞』2015年09月13日朝刊）。作中人物

たちの精神状況にこそよく目を凝らしてみたい。それがどう思想や行動という形をとって出てくるのかという過程を。

現代の商店街を舞台に描かれる物語。そこでなにがどう起こっているのか、そこからどんな「考えたいこと」が見つかるか（見つからないか）をじっくりと観察してみようと思う。

2 改革幻想 —— 正しさの妥当性を見抜くこと ——

商店組合の理事長の娘と結婚し若くして事務局長をしている凶領という男が、キーマンのひとりとして登場する。彼は「俺の考えてる改革はそういう、大量に回収する成功例とは違うんだよな」と嘯くように、自身の理想を改革、という言葉で他者のそれと差別化し、理想の成就へとまい進する姿を見せる。凶領は作中前半、人並みに長所と短所を併せ持つ若くて有能なリーダーとして存在感を発揮する。しかし中盤・後半へと進むに従い、その胸中を窺い知ることのできない不気味な存在へと変容していく。その過程では、凶領の目指した改革が次第に不穏なものへと変わっていく不気味さを、読者は目撃する。

しかし、だ。凶領が前半部でとった行動や発言に、全面肯定できるものではないかもしれないが、同時に全面否定もし難いものが含まれることを思い返さないわけにはいかない。ディスラー総統の誹

謗を受けてブログに綴った文章が悪くなることを恐れて、暴力を許していいんですか？ そうやって暴力と不正がはびこることに加担するんですか？ 私は嫌です。(略)間違った態度で無理難題を突きつけてきたときには、きちんと反論をすればいいのです。それがプロの商人としての責任です。(略)これをお読みの皆さんも、勇気を持って、卑劣さに立ち向かってください。には確かに正当性が含意されている。そのことは衆目の一致するところだが、それが、どこかを問う声は少ない。

衰退の一途をたどる商店街の中にあつて、自身の意見をはっきりと表明する凶領の堂々とした態度に、読者は胸のすく思いを重ねることもできるだろう。しかもここには、ブログの読者に決起を促す高揚感も漂う。ブログにこのように綴った言わば「公的な」発言の裏で、凶領は妻にこう言っている。△クレマーとは厄介な存在なんじゃないから、公然と退治してよい害虫みたいなものだって、宣言したんだから。悪者退治をたくてうずうずしてるやつらはわんさといふんだから。ここには自らが先頭に立ってクレマーや害虫を指定することでそれを退治する実行者が出現するのを待つ、扇動者の振る舞いの影が見え隠れする。

凶領には確かにリーダーとしての素質があるのだろう。先頭に立ち、周りを見渡して計画的に行動を起こすスキルを備えた人物であるようだ。それだけに、彼の思想や行動の思慮不足や誤りを察知し、指摘し、矯正を求めることは一層難しい。その困難さと向き合うことが本作の醍醐味でもある。△筋を通してきたからこそ、本当にお

かしいときには堂々と言い返すことができる。と彼が言い放つとき、果たしてこれにどう反論することができるだろうか。そのためになにが必要かを考えることが、凶領というキャラクターを通して投げかけられた問いとして理解されるべきだろう。

読者はここから、理性や論理のみに頼るだけでは追及できない「うさんくささ」を鋭く察知する直観を鍛えたり、孤独にならないことの重要さなど、複数の問題に目を向けることになるのだから。

3 包摂と排除その1 包摂：居場所としての商店街

凶領の掲げた改革幻想は、次第に具体的な形をとってストーリーの中で前景化してくる。物語の中盤・後半を通じ、彼とそのフォロワーが実行者として計画を進めていくのだが、そのやり方には包摂と排除という二つの相反する特徴がある。

一点目は「包摂」である。これは商店街の関係者や住民の取り込みと言い換えることもできるだろう。凶領が掲げた「居場所」としての商店街は、この文句は非常にキャッチーであり、親近感を自然に演出できる。彼等は二階建て、ぐらゐの小さな店が並んでるのが好きなんだよ。(略)普通でいられるところが必要なんだよね。客も店も、自分の目の届く規模、というかさ、と凶領の語るイメージは秀逸だ。しかし「自分の目の届く規模」とは、逆に言えば監視的な視線とも

受け取れる。

ここで考えてみたい。誰かの居場所が、同時にまた他の誰かの居場所でもある状態、とはどのような状態を意味するだろう。監視の例で考えるなら、それは相互監視的なゲーテッド・コミュニティ、あるいは一種の監獄状態と予想できる。これをストレートに伝えて共感を得られることはないだろう。凶領の演説の特徴は、聴衆が自ら進んで飛び込みたいと思わせる巧みさである。例えば彼は「新たな商店街は可能なのか。(略)「居場所」としての商店街です。(略)できます。作れます。「本物」だけを選び分けていけば。(略)何でも大歓迎ではいけないのです」と語っている。ここで彼は、自分たちこそが「本物」と理がどちらにあるかを一見選択させているのかのように錯覚させる。

こうした凶領の思想と行動は、商店街の住民たちを積極的かつ効果的に絡めとって行く。それは、住民たちから凶領の提案するもの以外の選択肢を取上げ、多数を形勢することで同調圧力をかけていくことに繋がる。警察のお世話にならず、未来系が自主的に解決するという空恐ろしい、凶領的正義の実現部隊や、彼等と似た金融機関以外から借金するのは、慎重になつたほうがいいと思うよ」と話題に上るような経済力を持つことは、巨大な権力を握ることと等しい。その結果、「商店組合の規約の大幅な改正が凶領さんから提案されたとき、何の異論もなく満場一致で可決された」という、専制的な状態が完成される。

凶領が提案した規約の大幅な改正——「新しい法」とも呼べるそ

れは、恐ろしいほどに自由を制限するものとなった。「店舗保存の法則」は店舗の不動産取引や賃貸契約の自由を認めないということに他ならないし、「未来人制度」は商店街の維持のためには自主廃業の自由を認めないという制限であり、「無尽」に至っては融資と同時に経営に関与し生かさず殺さずの状態にするというものである。

だが先にも述べたように、凶領が当初からこのように花開く悪意の萌芽を自覚していたとは言い切れない。心底から良いと信じていた理想と受け取る方が自然だと読める箇所も多い。だとすれば、凶領が抱げた「目の届く場所」のような、人々からの共感を得られる理想の中には、一歩間違えると巨大な不正義を呼び込むような脆弱さが存在するということなのだ。ではこの危険性をどうコントロールしていくか。ここで読者の理性は試される。

4 包摂と排除その2 排除：自己責任という欺瞞

凶領の思想と行動を考える際のもう一方の特徴が「排除」というやり方だ。「居場所としての商店街」という形で居場所を保証する一方で凶領は、その居場所に参加するしかないように霧生をはじめ住民たちを周到に追い込んでいく。その追い込み方は、「自己責任」という反論しづらい言い回しで人を孤独に陥れるものだ。⌘何でわざわざそんなことに力を入れてるかっていうと、霧生が言い訳できな

いようにするためだよ。(略)何か自分以外のことに責任をなすりつけて落ちぶれていくのを、許さないためだよ。他人のせいにはさせずに、自分でがんばってもらうためだよ」という台詞や、⌘特に強調したのが自助努力についてだった。(略)孤独に耐えられるメンタリティが必要なんです」という言辞には、すぐに言い返せない圧力がある。

だがこれは切り捨てでもある。選択の自由と同時に、人には失敗する自由もある。しかし凶領が示すヴィジョンに見られる非寛容さや多様な選択を排除する横暴さに仮に気付いたとしても、批判し、実際には是正するところにまで持ち込むことは極めて難しい。

こうして自己責任という欺瞞にがんじがらめになった時、渦中にある人間の精神は、責任を取るべく半ば不可避免的に自死を想起する。けれどその自死すらも、それを強制する不気味な力の影響からは自由になれない。その力の正体は一体何か。本作の後半は自死をめぐる大きな転換が訪れる。だが、何よりもまず、自己責任という言葉で人を孤独に追い込むことによって、自壊を含む破壊衝動を呼びかねないものである点に留意したい。

⌘世を捨てるような自棄な気分じゃなく、強い意志を持って率先して消えることで、次のもつとマシであろう世を生むことができるんだ」という考えに内在する何か歪んだものや、⌘場つなぎの人生のうちにこの身をすっかり差し押さえられたら、決起する自由を失ってしまう。後に大きな責任を残して逝くわけにはいかない」という発言への違和感はどこからやってくるのか。それは、理性的な精

神状態ではおよそ選択されないだろうと予想されるものが、正常と程遠い状態に留め置かれることで受動的に選択させられているように感じられる点からだろう。一見主体的に自死を選んでいるように見える犬伏ですら、人間としての尊厳が巧妙に奪われているように思われるのは決して気のせいではない。

それは△決起の効果をあげるためには、腐っていると自分たちが思うようなやり方にも、多少、目をつむるべきなんだよね?▽という、目的の為には手段は正当化されるという利己的で理不尽な行為すら、△それがクズだからな▽と人間としての尊厳を奪うことで、クズ△非人間へと墮落させることで思考停止に追い込み、実行可能とさせる。△クズ道というは死ぬことと見つけたり▽が真に恐ろしいのは、この思考停止状態を積極的に作り出す点にある。

しかしその思考停止を招く危険性として指摘される箇所は、自己責任の強要だけに留まらない。△自警団はいつの間にか図領が考える選民思想を実行する影の部隊になっていた。集ったのは人生に「手応え」を感じられない、どこかで「もつと重要な人物にならなくては」と思い込んだ者たちだった。組織に入ると彼らはまず、人格を根底から否定する、呪詛の言葉を浴びせられ、存在を無化される。自死が至上の価値だと思ひ込まれる▽ (書評、『読売新聞』2015年10月5日朝刊)と若松英輔氏が指摘するような、自らの裡に巢食う劣等感や不能感にも目を向ける必要があることは間違いない。鴻巣氏はこの点を△本作に特徴的なのは、「意識高い系」の人々である。目的意識、美意識などは高く、勇ましく、それをアピールすること

にも熱心だが、実際の合理的な計画性や、スキルや、行動が伴わない人たちのことだ。『呪文』は、意識高い系があまりこむ逆説的な畏(わな)を描いた町おこしディストピア小説とも言えるだろう▽ (前掲)だと指摘している。では本作は、このような劣等感や不能感といった「弱さ」を抱え込んでしまうこと自体を否定する小説なのだろうか。この点について、次項では霧生や湯北といった人物を通じて考えてみたい。

5 「弱さ」の持つ力

物語が中盤から後半に進んで行くに連れ、図領と霧生は対峙の構図を取る。それと同調するかのように、物語の中心から図領が遠景へと引いていき、霧生の選択や行動が中心化されていく。そのことで図領の最終的な意図や悪意の存在は確認されなまま幕引きがされる。こうした本作の構造的な特徴からも、本書の目的が図領個人を否定することにあるものでないことは明らかだ。作品の本質はむしろ△自ら呪われたがってる街▽の住人であり、その呪縛の渦中にあった霧生という弱い人物が、「呪い」から脱出できたという作品内事実で籠められた意味をどう読み解くか、という点にこそあるとみるべきだろう。

霧生は弱い。流され、判断を誤る。それは確かだ。しかし彼は、

かなり早い段階から凶領の考えに違和感を持っていた。何か自分に見えていないことがあるという不安が歯止めをかけるや、何か怖くてやという自覚を持ち、犬伏にやだから、誰がそれを決めるの？やと疑義を呈している様子が繰り返して描かれている。けれど残念なことによつて私的裁判に同席しろと事実上強要されているわけで、断る選択肢は用意されていないと霧生は観念したやとあるように、意志に反して歩かされているその足を止め、方向転換を図るまでの力を持つには至らない——霧生の弱さはこのように描写される。

だが霧生に表象された「弱さ」は、最終的には、弱さと親和性が高いある種の「力」へと形を変えて表現される。

一つは、「他力に頼る余地」、とでも呼ぶようなもの。相沼の内省にや勇氣は一人だけでは持てない、恐怖は一人だけでは乗り越えられないやというものがあつた。これに似たものとして、霧生が湯北からかけられた言葉の中にやその衝動に支配されたら、いわば呪われたようなもので、自分の力だけではどうにもできない。止めようはないの。だから、まわりの力が必要やというものがあつた。霧生はまさしくそのような、他力に頼る余地のある人間として描かれている。但し頼るべきその相手を正しく見つけること、困難さという別の難問もここには存在しているのだが、ここでは指摘するに留める。

もう一つが、霧生のこれまでの人生の節目節目で決断の契機となつた「手応え」——「直観を重視する力」とでもいうべきもの。湯北からやもつと自分の直観を信じてあげなよやと声をかけられては

いるが、先に確認した凶領へのいち早い違和感のように、霧生は直観の働かない男ではない。事実は丸きり逆で、霧生自身は「手応え」と呼ぶその直観を真剣に鍛え続けてきた男なのである。それは一つのトルタを完璧に作り上げた瞬間に降りてくるややや必死で努力している、手応えがいつの間にか自分の中に訪れているやという箇所から裏付けられるだろう。

こうした弱い霧生だからこそ、他人に頼ることができ、結果的に最悪の状況を回避することができた。この救済を招いた原因を、仮に「弱さ」の持つ力と言ってみよう。この「弱さ」の持つ力を考察する際に極めて印象的な箇所がある。湯北によつて救われた後の車中で、霧生がやつまり、トルタ作りから逃げる口実をどこかで求め始めていたやと自らの心の弱さや過ちについて深く、しかし潔く自省するシーンがある。霧生の「弱さ」が、「弱さ」の持つ力へと転換されるさまが物語を通して表象される本作の後半部において、まさにこの霧生という弱い人間にこそ仄かな明るさが宿つたように感じられる。なぜなら、自らが弱いことを自覚しているが故に自分の弱さと真剣に向き合い、反省的な見直しを自身に迫ることができると素直さ、つまり「可謬的な態度」が備わっていることを認められるからに他ならない。

霧生は自身の死は免れたものの、他方では決起を呼びかけた首謀者でもある。そのことで、犬伏、相沼、数度、カジニヨ、そしてレオを自殺へと追い立てることになった。自殺教唆とも言うべき、この五人の十字架を背負い続ける過酷さは筆舌に尽くし難いものが

あるだろう。それでも霧生はそれに向き合い、自由を選ぶだろう。だからこそ読者は、これから松保でトルタ作りを続けることの意味。あらゆる逆風に逆らって歩き続ける、もしくはとどまり続けるんであって、風になびいてしまわないことが生きることになるんだよ。そのどこが雇われ人生？という湯北と霧生の対話の中に人間の尊厳の回復を見出すことができるのだ。この点にこそ、悲劇の中から一筋の希望を見出すことができるのではないだろうか。

6 政治というホモ・ソーシヤルな空間

本作には、凶領、霧生とならばキーパーソンとして湯北が登場する。湯北は兎鍼を学んだ動機がね、完全殺人をするためだったとと語るように、複雑な過去を持つ人物として描かれている。殺意や破壊という自制不可能な衝動を抱えた経験があるという点で、湯北と霧生には共通点が見いだせる。同じ衝動に苛まれた体験を持つものとして湯北が霧生を救ったように、湯北もまたその殺人願望を誰かに救われた過去があるのだろうと思わせる。しかし、一方は殺人を行わず、一方は自殺教唆をし犬伏たちの身の上に死を呼び込んでしまった。この差は決定的なものだが、その差異についてここでは問わない。確認したいのは、湯北と霧生という二人が、凶領や未来系といった呪いの勢力圏から一步距離を置いたところにいることができたのは何故か、という点である。

一見正しそうな言葉や理性を頼るだけでなく、鍼灸の持つ直な感触。確かにこの受け身で無防備に急所を押えられている感覚では、攻撃的な気分はそがれる。霧生の深いところから、息が出るという点や、リズムカルにトルタを仕上げる身体感覚を相当程度重視する点などが、湯北と霧生を繋げるもう一つの共通項だろう。

破壊衝動からの救済体験と身体性の重視。この二つが、呪われていた商店街からの脱出にどう寄与しているのか——。これもまた本作に籠められた問いの一つだ。

さらに別の問題点も想起したい。——サムライ女子の相沼と、凶領の妻・阪部秋奈の存在である。サムライ女子とは何か。作中では最近急増してメディアでも話題になっているとされ、その肚の据わった精神性を実践しようとしているところに特徴があったとと説明される。相沼が女性であるにも関わらず本作において前景化しているのは、サムライ、つまり（女性）男性化が起きているからだと考えられる。政治的な空間に主格を持つて登場する為には、女性は男性化あるいか無性化という形で女性性を離れる必要がある（逆説的な去勢）という主張を、テクストに織り込まれたものとして読み取ることができる。そもそもサムライ自体が、男性社会における記号である。江戸時代の士農工商という身分制度に見て取れるように、ホモ・ソーシヤルな社会での「強さ」を示す記号でもあるのだ。ここから、商店街という生活に地続きの場所で行われる（地方）政治が、非常にホモ・ソーシヤルな構造を備えていることを指摘している、という風に解釈することもできるだろう。

だが、それ以上に気になるのが、阪部秋奈という不気味な人物である。彼女は「凶領」秋奈という「妻と二児の母」という顔を持つと同時に、「阪部」秋奈という老舗の居酒屋を継ぐ商店街の「経営者」の一人でもある。彼女の視線は、松保商店街というローカルな場を遥かに飛び越えている。「経営者」としての彼女は、政官財界とも直接交渉するような、作中では直接描かれない「もう一つ」の政治空間へも接続している。そこには凶領も未来系も湯北も霧生も存在しない。国家レベルの、商店街というローカルとは異なる思想と行動が繰り広げられている。そして作中で唯ひとり秋奈だけが、商店街

【あらすじ】

松保商店街で取る多スタンド(メキシコ風サンドイッチ)を始めた霧生は、寂れゆく商店街にのまれて経営不振。商店街で唯一流行っている居酒屋「麦ばたけ」のオーナーであり友人の凶領の店に悪意に満ちたクレーマーが訪れ、巧妙に演出された中傷文がネット上にばら撒かれた。騒動は商店街を巻き込んで拡大するも、凶領は泣き寝入りしなかった。ブログ自身の反論を堂々アップすると、その行動はネット上で喝采を受け、共感した人々が次々と商店街に訪れる。にわかには活気を帯びた商店街と、勢いに乗る若き街のリーダー凶領。彼は空き店舗に次世代の働き手を斡旋し、自警団「未来系」を立ち上げ、旧態依然とした商店街の大改革に着手する。仄かな希望の光が差し始めた商店街の未来に、誰もが喜ばずにはいられなかったのだが……。

と政官財界という二つの政治空間を横断し、どちらからも自由でいられる埒外の存在なのだ。しかし、埒外にいる超越的な存在こそが、本当に不気味なのでもある。



【著者プロフィール】

1965年ロサンゼルス生まれ。88年早稲田大学を卒業。新聞社勤務後、メキシコに留学。映画の字幕やラテンアメリカ文学を翻訳。97年「最後の吐息」で文藝賞を受賞してデビュー。00年『目覚めよと人魚は歌う』で三島由紀夫賞、03年『ファンタジスタ』で野間文芸新人賞、11年『俺俺』で大江健三郎賞、15年『夜は終わらない』で読売文学賞を受賞。

参加者…7名

進行…芹澤

【会の記録】

感想や意見

- ・怖い小説だった。正しさを追求する中での軋みが印象に残った。
- ・気持ち悪いけれど面白い。かつて成功しているモデル商店街に取材したことが思い出された。
- ・ちよっとついていけなかった。嫌いな感じ。オウムみたいな不気味さ、洗脳のイメージがある。商店街の問題がどうしてこんな仕方もないことになってしまうのかつかめなかった。
- ・凶領のラストがわからず、気になる。
- ・物語の設定がいかにも同時代な感じ。クズ哲学や洗脳の様子にはついていけない。実感もあまりわからない。
- ・ねじれた感じ。どうしたもんか、という途方もなさがあった。今風の物語や舞台なのに、神社がキーポイントで出てきたりして不気味だった。
- ・登場人物の固有名詞などに独特の気持ち悪さがある。いかにも現代風の風俗や言葉遣いが表面的に感じた。
- ・商店街が舞台ということで、ローカルなごく狭い世界（世間）に収束している。そのことで、一般サラリーマンには共感しにくい世界観になっている。個人事業主にしか分からないような独特の世界観、というか。
- ・もちろんこの商店街が現代社会や日本の縮図だったり、ひとつの箱庭として構想されているんだらうなということは想像できる。が、自分自身がここにはいないな、という印象も拭いきれなかった。
- ・た。
- ・松保商店街のモデルとして、郊外のショッピングセンターを想像した。
- ・大山商店街を想像した。
- ・公団住宅の中にある小さな商店街を想像した。
- ・武蔵新城、武蔵小杉あたりの商店街。
- ・自由が丘の隣、都立大学や学芸大学あたりの商店街／住宅街を想像して読んでいた。